

## 「キッチン」を読んで

福祉臨床学科 武藤 来未

「生も歓喜、死も歓喜よ。」

これは私の祖母の口癖だった。この時、私にはどうして祖母が「死も喜び」というのが分からなかった。亡くなる当日でさえ友人を連れて、卓球クラブに足を運ぶような、驚くほど元気で快活な祖母が突然亡くなった。本当に、あまりにも突然、いなくなってしまった。大切な人を亡くしたことがなかった私は、人が死ぬという感情を初めて経験した。こんなにも寂しくて、悲しくて、恋しいのだと。二年と半年が経つ今もまだ、祖母に会いたくなってたまらない時がある。死が必ず来ること、避けては通れないことだとわかってはいた。けれど、死が生きている私たちにもたらすものを本当の意味で理解できていなかったと痛感する。

祖母を亡くしたみかげと同様に、私も何度も祖母の夢を見た。思い出して悲しく思うことはあったが、その度に夢の中で祖母は笑っているから、どれだけ時間が経って、寂しさは消えなくとも私の中に祖母は生きているのだなと感じる。

みかげの言葉に「幸福とは、自分が実はひとりだと感じなくていい人生だ」とある。天涯孤独になってしまったみかげにしか気づくことができない言葉だと感じた。生まれた時から、誰もが誰かに支えられて生きている。誰かが言う「ひとりになりたい」というのは、周りに支えられ、見守られ、安全な場所で少し距離が離れても、心が離れないと確信しているから言える言葉だ。

本書で語られるたくさんの誰かの死を通して、それぞれの大切な人が、日々、どこかで亡くなり、またどこかで生まれてくることを改めて感じた。普段、死を意識することは多くないけれど、生きている限り、死とはいつも隣合わせなのだと思います。

近年、世界中を震撼させている新型コロナウイルスの報道を見て、世界で何十万人という死者数に、これは現実の話かと信じ難い。誰かにとっての大切な人がこんなに亡くなることになっていいのだろうかと思ってしまう。私にできることは小さなことだが、いつか来る死から逃げることなく、みかげのように周りの人を大切にしながら生きていきたい。

本書は、当たり前のように生きているように見えるこの時代にも、死は身近なものであることと、後悔なく人生を大切に生きることの重要性を、強く読者に訴えかけている作品だった。どんなに楽しくても、どんなに苦しくても、ただ前を見つめながら、人は生きねばならない。